



ひらの い あつし
平野井 篤さん

昭和11年、樺太生まれ。小樽とのかかわりは、昭和33年に小樽水産高校専攻科で海技を学んでから。3年ほど商船に乗った後は、厚岸水産高校で教員となり、小樽水産高校での教頭を最後に退職。現在は小樽海洋少年団とB & G小樽海洋クラブの事務局長を務める。桜在住。

海なくして我が人生は語れず

カッターレース大会を復活させ、さらに夢を追う

☆☆キラリだと☆☆

「1回目、きつとほそぼそとやるんだらうなと思ってたけども、予想以上の盛り上がりでしたね。協力してくれた皆さんに感謝感激です。団員の子どもたちも、よく手伝ってくれました」
昨年の8月、カッターレース大会が5年ぶりに復活。運営は主に小樽海洋少年団が行い、平野井さんはその中心人物でした。カッターとは、角形船尾の訓練用小型ボートで、大会では、海洋少年団が所有する10人定員の6人手こぎカッター

を使いました(下の写真)。
「大会をやりたいと思ってから復活させるまで、3年かかってます。海離れ・港離れで港があまりに寂しくてね。でもまだ夢の途中です。難しいかもしれないけど、週末とかに誰でも気軽に小型ヨットや手こぎボート、カヌーに乗れる、市民が楽しめる港の施設が欲しいんです」
教員の経験もある平野井さん。教員時代には、生徒や親からたくさんのお話を教わったと言います。



第1回大会には、8チームが参加しました。第2回大会は、今月21日(日)に行われます。

「一生忘れられない言葉があります。ある生徒の父親が言った『学校は教育する所ではない、人道の心を学ぶ所だ』という言葉。ズキンと心に響きました。父親は、教師や学者ではない、体を張って働く漁師。経験からの言葉ですよね。価値があると思います。今でも自分は生徒に何を授けたかと自問自答します。退職後の方が、海への思いは強くなったそう。平野井さんの夢は続きます。
「海がなければ、自分の人生はないですね。毎日のように海にありがとうございます。毎日が感謝です。海があるから、大会もできましたね。あと、余談ですが、実はもう一つ別の夢があります。自宅でイトウ(絶滅の危機にある淡水魚)の養殖をやってね、15年続けてきたけど、このたびやっと、ふ化に成功したんです。努力をすれば何でもできますね」

おたる坂まち散歩

第四十四話



山中海岸の坂 チャラセナイの滝

バス停「オタモイ団地」から海に向かって進むと、左はオタモイ海岸、まっすぐ進むと山中海岸と表示があります。未舗装の道をしばらく行くと、車道は行き止まりとなり、左手には神社があります。海岸への下り口では祝津からの小樽海岸自然探勝路が交わっています。この標高は約百六十メートルあり、ここから山中海岸へ下っていく坂道が今回紹介する山中海岸の坂です。

山中海岸へ下るこの道は、坂道と言うよりむしろ山道という雰囲気、急な斜面を左右に蛇行しながら下っていきます。周りはうっそうとした森で、季節が合えば下草の花々を楽しむことができます。頭上から降ってくる鳥のさえずりを聞いていると、海岸に行くというより、森の中をさまよっているような錯覚すら覚えます。

道は途中で何力所か分かれていますが、どちらを選んでもいずれば足もとが滑りやすくなります。赤土の道は、雨のあとは足もとが滑りやすくなります。二十分ほどで海岸近くの平坦な草原に出ます。ここは背丈ほどの草をかき分けて歩かなければならない一番の難所です。前方の見えない草原を抜



けると急に視界が開けて、日本海が目の前に広がります。ここが山中海岸です。大小の岩が転がり、海面から多くの岩が顔をのぞいています。かつて漁業に使われていたものなのではないかと、小屋の跡や、侵食されたコンクリートの残骸が海中に残っています。

海岸には浅い潮だまりが広がっていて、家族での磯遊びには絶好の場所です。徒歩でしか行けないためか、訪れる人も少なく、いつも静かな場所です。皆さんも子どものころ、親に連れられて来たことがあるのではないのでしょうか。

海岸を右に百メートルほど歩くと、海岸に迫るがけから流れ落ちる一条の滝があります。冷たききれいな水の流れ落ちるこの滝は、盛夏でも枯れることがないのだそうです。幕末の探検家、松浦武四郎が『西蝦夷地誌』に記録した、チャラセナイという地名はこの滝を指すのでしょうか。

磯遊びで疲れた帰りの上り坂はこたえます。幼い子どもを連れて行くと、疲れてくずる子を背負わなければなりません。一步一步坂を上ると、わが子の甘酸っぱい汗のおにに、自分も親に背負われて帰った幼い日を思い出すのです。

元気のもと！なかま

空を自由に駆るそう快感

小樽ラジオコンサークル

「ボート、車、飛行機やヘリコプターなど会員はいろいろな種類を持っています。自由自在に操縦することができ、どれをとってもそれが一番の魅力です」と会長の岡部清さん。

このサークルは定足して今年で32年。現在の会員は、30〜70歳の30人からなり、学生のころからのベテランが多いのが特徴です。

「昔はそれなりに費用がかかりましたが、最近ではインターネットで部品などを買えるので、だいぶ手が届きやすくなりました。最も大事なものは安全の確保。騒音や事故などで迷惑をかけないよう、無線の混信を防ぐなど事故の予防とマナーを徹底しています」

毎年2回の大会、2回の洞爺湖への遠征のほか、最近では飛行場を2年がかりで設けました。外部主催の大会へも出場するなど、熱心に活動しています。

「ラジオコンを楽しむには、経験者の指導が欠かせません。会では、初心者の方にも乗るほか、操縦体験もできます。一度やってみませんか」

▽連絡先/岡部さん
☎090(1304)0834



市内で活躍するサークル・団体の情報を、広報広聴課へお寄せください(※先は裏表紙に記載)

※皆さんからお寄せいただいた坂の情報は、次回からご紹介していきます。